

4 出土遺物

遺物は、江戸時代の陶磁器や瓦、石臼などの石製品、漆器の椀や下駄といった木製品のほか、室町時代から戦国時代の陶磁器、そして平安時代の土器が出土しました。

江戸時代の陶磁器には、碗や皿(食器類)、播鉢(調理具)、壺(貯蔵具)、茶碗(喫茶用具)、火入(喫煙具)、ひょうそく(灯火具)のほか、仏飯具や花瓶、焔炉なども出土しています。これらの陶磁器は、伊万里焼や唐津焼などの九州地方北部で生産されたものを中心に、瀬戸や京・信楽、越前、越中や東北・関東の諸窯で焼かれたものも含まれ、これらが各地からもたらされていることがわかります。また、瓦には黒瓦(燻し瓦)と赤瓦(塗り瓦(施釉瓦))があり、文様が施された軒丸瓦や軒平瓦のほか、鬼瓦も出土しました。

室町時代から戦国時代の陶磁器は、中国産の青磁や白磁、青花の碗や皿、かわらけや瀬戸美濃焼の天目茶碗や皿、瓦質土器の播鉢など、国内で作られたものも出土しています。

平安時代の土器は、須恵器の杯や瓶類、甕などが出土しました。

新発田城跡では、これまでの調査でも江戸時代の遺構のほか、室町時代から戦国時代の屋敷跡や、平安時代の建物跡が見つかっています。新発田城の立地する場所が周辺に比べ微高地であることから、昔から人々が暮らしやすい場所であったと考えられています。



出土した江戸時代の陶磁器類

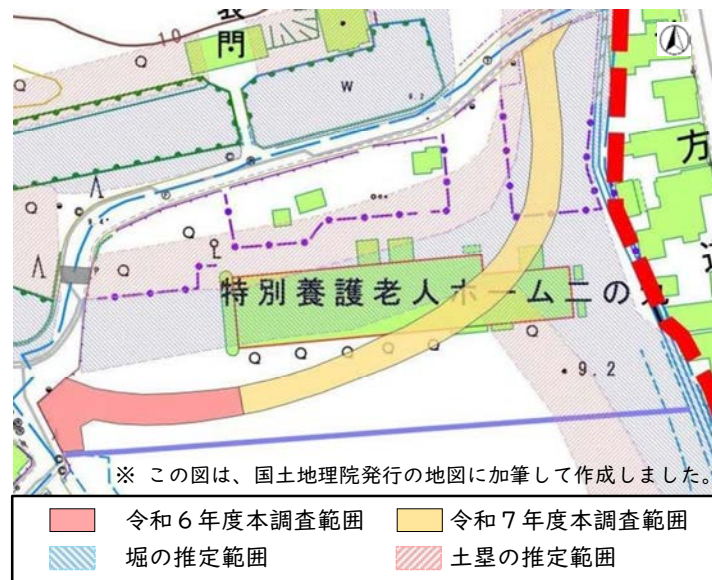


出土した江戸時代の瓦類

5 まとめ

今年度の調査で、西側では江戸時代の造成跡(整地層)が見つかりました。過去に行われた第26地点の調査でも二ノ丸南西部で整地層が検出されており、土地の用途などにあわせて地盤改良工事を行ったと考えられます。

また、調査区の東側では溝や土坑などの遺構が検出されました。絵図には重臣屋敷地や御用屋敷があったと記され、この場所からは多くの遺物が出土しました。来年度の調査でも、新たな成果が期待されます。



新発田城跡(第33地点)の調査範囲

新発田城跡(第33地点) 発掘調査現地説明会資料

令和6年10月19日(土)
新発田市教育委員会
株式会社 吉田建設

1 概要

新発田城跡は、江戸時代に新発田藩を治めた大名である溝口氏の居城です。

新発田市教育委員会は、令和6年8月から市道外ヶ輪公園大手門線整備事業に伴い、道路の法線部分で発掘調査を行っています。今回の調査は2箇年調査の1年目にあたります。



新発田城の位置(1:200,000)

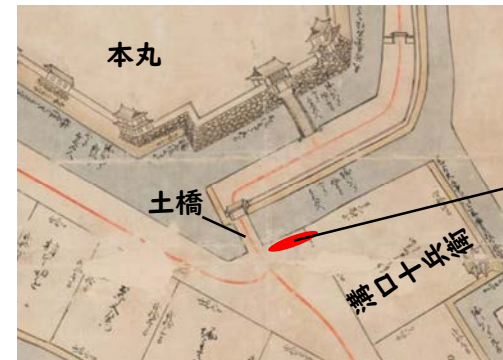


新発田城の範囲と調査箇所(1:25,000)

※ 上図は、国土地理院発行の地図及び基盤地図情報に加筆して作成しました。

2 調査地の履歴

今回の調査地は、新発田城の二ノ丸の土橋の南東部にあたります。正保年間(1,600年代中頃)の絵図では、この箇所は重臣屋敷地の一部となっていますが、天保年間(1,800年代中頃)とされる絵図では、「御用屋敷」と記されています。「御用屋敷」は、藩の公務を行うための施設で、元禄元年(1,688年)にこの場所に建てられ、文政四年(1,821年)に城内の三ノ丸へ移転しました。その後は再び重臣屋敷地となり、新発田城廃城後は陸軍の衛戍病院、戦後は国立を経て、県立新発田病院の敷地として利用されました。そして、平成18年に新発田病院、令和5年に特別養護老人ホーム二の丸が移転し、現在に至ります。



正保年間(1,600年代中頃)の新発田城の絵図
(『御家中絵図』新発田市立歴史図書館蔵)



天保年間(1,800年代前半)の新発田城の絵図
(『一歩一間歩詰絵図』新発田市立歴史図書館蔵)

3 遺 構

遺構は、現地表面から約 1 m 下で見つかり、平成 24 年に調査した隣接する土橋石垣上面の高さよりも 50 cm 以上低いことから、当時の地表面が削られた状態と考えられます。

今年度の調査区内は、中央部が病院時代の建物で大きく壊され、その西側と東側に分かれて遺構が残っていました。西側では、広い範囲で江戸時代の造成に伴う整地層が見つかりました。整地層は、黒い土や灰色の粘土混じりの土や砂を幾層にも重ねていて、その厚さは最も厚いところで約 60 cm ありました。



柱穴(P10)の柱の跡(南西から)



整地層断面(北東から)



溝(SD25)の遺物出土状態(南から)



溝(SD20)の遺物出土状態(西から)

